

氏 名	井関 千裕 (いせき ちひろ)
学 位 の 種 類	博士(看護学)
学位授与番号	甲博看第10号
学位授与年月日	令和5年3月8日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学 位 論 文 題 名	転移性乳がんと診断された成人女性の心理的適応を促進する看護介入プログラムの開発 (Evaluation of a Nursing Intervention Program to Promote Psychological Adjustment of Adult Women Diagnosed with Metastatic Breast Cancer)
論 文 審 査 委 員	(主) 教授 竹村 淳子 教授 荒木 孝治 教授 鈴木 久美

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

《緒言》

乳がんは日本人の成人女性において死亡率が第一位である。転移性乳がんは治癒が困難だが、新薬の開発に伴い延命が可能となっている。しかし、転移性乳がん患者は、長期にわたりがん薬物治療を継続しなければならないため、不安・抑うつなどの心理的苦痛が強く、Quality of Life(以下、QoL)が低下する。そのため、転移性乳がんの診断による成人女性の不安・抑うつが緩和され、がん薬物治療を継続しながらQoLの改善を目指すことが重要である。そこで、本研究は、転移性乳がんと診断された成人女性の心理的適応を促進する看護介入プログラム(以下、看護介入プログラム)を開発することを目的とした。

《目的》

本研究は、転移性乳がんと診断され、がん薬物治療を受けている成人女性の心理的適応を促進する看護介入プログラムを開発することを目的とし、以下の3部で構成されている。
第一部の研究:がん薬物治療を受けている転移性乳がん患者のQoLとその関連要因に関するシステマティックレビューを行い、がん薬物治療を受けている転移性乳がんの患者のQoLとその関連要因について明らかにすることを目的とした。
第二部の研究:転移性乳がんと診断され、がん薬物治療を受けている成人女性の心理的適応に至るプロセスを明らかにすることを目的とした。
第三部の研究:第一部と第二部の研究、転移性乳がん患者を対象としたシステマティックレビューの結果(Beatty et al., 2018; Mustafa et al., 2013; Pang et al., 2022)を基に「転移性乳がんと診断された成人女性の心理的適応を促進する看護介入プログラム」を作成する。そして、乳がん看護認定看護師の意見をもとに、作成した看護介入プログラムの妥当性と臨床適用可能性を評価することを目的とした。

《方法と対象》

第一部の研究は、がん薬物治療を受けている転移性乳がん患者のQoLとその関連要因について、21文献を対象にシステマティックレビューを行った。第二部の研究では、転移性乳がんと診断されて3か月以上3年未満の成人女性21名を対象に、半構造化面接を行った。データは、木下の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析された。第三部の研究は、第一部および第二部の研究結果と、転移性乳がん患者を対象とした介入研究のシステマティックレビュー等を基に看護介入プログラムを作成し、乳がん看護認定看護師(以下、認定看護師)75名を無作為抽出し、看護介入プログラムの妥当性や臨床適用可能性を問う質問項目で構成された質問調査を行った。

《結果および考察》

第一部のメタ分析の結果として、868人のFACT-Bの総合得点の平均は、86.98(95% CI [76.12, 97.84])だった。621人のEORTC QLQ-C30のGlobal QoLの得点は、56.70(95% CI [52.33, 61.06])だった。患者のQoLの関連要因として、がん薬物治療のうち化学療法、身体症状の痛みと倦怠感、精神症状の不安と抑うつ、病状進行が示された。第二部の研究結果として、21概念と7カテゴリーが生成された。成人女性は、医師から転移性乳がんと診断され、【死の世界に引き込まれる脅威】、【辛いがん薬物治療への葛藤】を抱いた。その後、成人女性は、【強力なサポーターの支援】により、【生命を繋ぐ覚悟】を決め、がん薬物治療に臨んだ。がん薬物治療中、成人女性は【転移性乳がんを内在化することへのもがき】という苦悩から【強力なサポーターの支援】により、【転移性乳がんを内在化することへの努力】を始め、【自己意識の拡張】に至るプロセスを辿ることが示された。第三部の結果として、認定看護師44名(回収率58.6%)から回答が得られた。その結果、認定看護師から看護介入プログラムの目標や構成内容、介入方法等について概ね肯定的回答が得られ、看護介入プログラムの妥当性が認められた。また、認定看護師から看護介入プログラムは実践に役に立つ、教育資材になる、他のがん患者にも適応できる等の意見が得られ、臨床適用可能性も確保された。一方、介入内容については、がん関連の認定看護師との協働が必要である等の改善点があげられたことから、さらに看護介入プログラムを洗練することが必要であると考えられた。

《結論》

本看護介入プログラムは、第一部の研究でがん薬物治療を受けている転移性乳がん患者の QoL とその関連要因の知見を統合し、第二部の研究では転移性乳がんと診断されがん薬物治療を受けている成人女性の実証研究を行うというプロセスを経て開発された。したがって、本看護介入プログラムを活用することにより、転移性乳がんと診断された成人女性の心理的適応のプロセスを促進し、がん薬物治療を継続するなかで QoL の改善が期待できると考える。今後の課題は、本看護介入プログラムを臨床適用し、介入研究による看護介入プログラムの有効性と有用性を検証することである。

論文審査結果の要旨

本論文は、長期間の薬物療法を受け、心理的苦痛が強い転移性乳がんと診断された成人女性の心理的適応を促進する看護介入プログラムの開発を目的として行った研究である。

第一部の研究は、システマティックレビューによって、がん薬物治療を受けている転移性乳がん患者の QoL とその関連要因を明らかにした。メタ分析の結果、868 人の FACT-B の総合得点の平均は、86.98 (95% CI [76.12, 97.84])、621 人の EORTC QLQ-C30 の Global QoL の得点は、56.70 (95% CI [52.33, 61.06]) だった。患者の QoL の関連要因として化学療法、痛みと倦怠感、不安と抑うつ、病状進行が示された。

第二部の研究は、転移性乳がんと診断された 21 名の成人女性を対象に、木下の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて、がん薬物治療を受けている成人女性の心理的適応に至るプロセスを明確にした。結果は、医師から転移性乳がんと診断され、『死の世界に引き込まれる脅威』、『辛いがん薬物治療への葛藤』を抱いた。その後、『強力なサポーターの支援』により、『生命を繋ぐ覚悟』を決め、がん薬物治療に臨んだ。がん薬物治療中、『転移性乳がんを内在化することへのもがき』という苦悩から『転移性乳がんを内在化することへの努力』を始め、『自己意識の拡張』に至るというプロセスが明らかとなった。

第三部の研究は、転移性乳がんと診断された成人女性の心理的適応を促進する看護介入プログラムの作成と、その妥当性と臨床適用可能性の評価を実施した。プログラムは、第一部および第二部の研究結果と、転移性乳がん患者への介入研究のシステマティックレビュー等を基に作成された。プログラムの目標は、不安や抑うつの緩和、がん薬物治療への葛藤や抵抗感の軽減、心身の変化に合わせた生活の調整による QoL の改善とし、1 回 30 分の介入を 5 回とされた。プログラムの妥当性は、無作為抽出で選出された乳がん看護認定看護師を対象に質問調査を行い、プログラムの妥当性および臨床適用可能性も確保されたという結果を得た。本研究の独創性は、強い心理的苦痛にありながらも、そこから適応へ向かおうとする人の強さを高めようとした着眼点にあり、がん看護の新しい知見を導き出した。論文審査では今後の活用方法の質問に対し明解な回答が得られた。以上により、本論文は本学大学院学則第 13 条第 3 項に定めるところの博士（看護学）の学位を授与するに値するものと認める。

（主論文公表誌）

Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing, 10(3) :100184